



TITLE:

# ボルシェヴィズム分解の傾向

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

---

CITATION:

河田, 嗣郎. ボルシェヴィズム分解の傾向. 経済論叢 1921, 13(1): 143-144

ISSUE DATE:

1921-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127795>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十卷 第一號

大正十年七月一日發行

## 論叢

利潤の經濟的道徳的性質(二)

法學博士 田島 錦治

營業の租稅給付能力

法學博士 神戸 正雄

進歩か退歩か(二)

法學博士 財部 靜治

農業勞働問題(二)

法學博士 河田 嗣郎

中世都市の發達(二)

文學博士 三浦 周行

## 時論

直接稅制度の整理に就て

法學博士 小川 郷太郎

## 說苑

我國農產物生産調査に就て(二)

法學博士 高岡 熊雄

## 雜錄

米國一家五口最少生活資調

法學博士 山本 美越乃

Luca Paciolo 以前の會計史概要

法學士 大森 研造

家畜保險に就いて

經濟學士 野口 正造

ボルシェヴィズム分解の傾向

法學博士 河田 嗣郎

## ボルシェヴィズム分解の傾向

河田 嗣 郎

露國のボルシェヴィズムは外國の壓迫と國內の反革命運動とには、打勝つて來たが、今や内部の不一致の爲めに分解せんとする傾向を示し始めた。洵に露國民の社會的構成は、それが小農階級を主とすることゝ、自覺あり活力あるブルジョア階級の缺けたることゝ、勞働階級が政治的に甚しく後れて居ることゝ、智識階級が日和見主義で然かも革命的性向に富めることゝの爲めに、革命的恐怖政治をして一時其の地歩を得

せしめたが、其の事情は今や再び廻つて、ボルシェヴィズム解體の素因を爲すことゝなつた。今や露國は飢えつゝある。其の國民經濟は一步々破綻に近づきつゝある。然るに此を救ふの道に就いて、レーニンとトロツキイとの間に大いなる意見の相違を生ずるに至り、之が直接の動機となつて、ボルシェヴィズムは内部よりして崩れんとする傾を示して來たのである。

トロツキイの意見では、此の難局を救はん爲めには、從來よりも更に一層嚴格なる共產主義的勞働制を立つるを必要とし、工場と農業經營とに對する監督を嚴にし、悉く之を國營に移し農民を強制して都市住民の爲めに食糧生産の任に當らしめ、勞働組合を鞭撻して之を共產主義化し政治化するを必要とするを考へて居る。そして彼の意見は多數の有力者に依て支持されて居る。然るにレーニンは之に反して、生産の増加は、更に嚴峻なる強制と中央集權制とに依つては齎され得べきにあらず、たゞ一の緩和された生産的民主制に復歸することに依てのみ效果

を擧げ得べしと考へて居る。従て彼は其の同志一派と共に、經濟的任務をば勞働者の意思代表機關としての勞働組合に移任し、外國の資本會社と通商の道を開き、農業と鑛山業とに關する權利をば、露國の爲めに其の國民經濟を復活せしめ、勞働者に十分なる賃金を支拂ひ得る企業團體の手にも、賦與せんことを希望するのである。

此の二大流以外にも尙ほ幾多の細流があつて露國の勞働者は尙ほ未だ共產的勞働制の實行を爲し得る迄に成熟して居らぬのだから、トロツキイ流の勞働軍隊化を排し、産業をば勞働組合と産業組合との自由なる結合團體の手に委かすを必要とするといふ見解が、其等の間に有力に表はれて來た。

何れの流派が勝つか。何れにしてもボルシェヴィズムが内部から搖いで來たのは事實である。事情が今後如何に發展するかは逆睹し難いが、恐らく露國の將來は、勞働組合及び産業組合と結合せる農民民主制の組織となるであらう\*。

\* 此の短文は H. Cunow, Die Zersetzung des Bolschewismus, Die Neue Zeit, 25 März 1921. に抄譯したものである。